昭和学士会誌　第82巻　第５号〔357-365頁，2022〕

特　　集　富士吉田教育部における初年次学部連携教育

学部連携科目としての選択科目
―初年次教養教育の諸相―

昭和大学富士吉田教育部リベラルアーツ教育研究班
田中　周一*　須長　史生　齋藤　範
昭和大学富士吉田教育部情報科学班
小倉　浩
昭和大学富士吉田教育部サイエンスＢ班
長谷川真紀子
昭和大学富士山麓自然・生物研究所
平井　康昭
昭和大学富士吉田教育部生理学・生化学班
荒田　悟

1. 緒　　言

教育機関たる医系大学の使命は高い専門性を有する優れた医療人の輩出である．この高い専門性は，将来の職業人をめざす以上，必要不可欠ある．しかし同時に，これは必要条件であって十分条件ではない．

富士吉田教育部は１年生のみを対象とする教育を実践する場であるが，その教育理念は「富士吉田教育部の教育理念」[1]として明文化されている．以下がその全文である．

> 医系総合大学４学部の学生が恵まれた自然環境のもとで心身を鍛え，全寮制共同生活をおくるという独創的な制度を生かし，将来チーム医療を担うために，視野を広げ豊かな人間性を育む．さらに，地域・国際社会との交流を通して広い社会性を身につけた真の医療人となるための自覚を促し，専門領域につながる基礎学力を身につけ自ら問題を発見しそれを解決する意欲と能力の向上を図る．

「専門領域につながる基礎学力」を育成することが初年次教育を担う富士吉田教育部の使命であり，また，それを実現する基盤となるのが「視野を広げ豊かな人間性を育む」教育にほかならない．「真の医療人」は必要条件のみならず十分条件を満たしてこそ実現できる．この「視野を広げ」ることに絶大な力を発揮するものが多様な教養系選択科目である．

この教養系選択科目は専門学部の枠を外した学部連携授業となっており，このこともまた履修生の視野を広げるうえで有効である．学部の異なる履修生の個性は多様であり，自由意思で選ぶことのできる科目を履修する同じ志向を有する学生たちでありながら自身とは異なる多様性の存在に気づく契機を見出すこともまた可能となる．

教養系選択科目は，事実上，１年次のカリキュラムの中にしか存在せず，その果たすべき役割は大きく，責任もまた重大である．本稿ではこの教養系選択科目が今日の姿に至る経緯や実際に開講されているいくつかの科目の紹介とともに，今後の課題を含めた将来への展望を記すこととする．

2. モデル・コア・カリキュラムとの関係の概要[2]

2001年，医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議（文部科学省主催，高久史麿座長）か

*責任著者

ら，「21 世紀における医学・歯学教育の改善方策について，―学部教育の再構築のために―」の別冊として「医学教育モデル・コア・カリキュラム―教育内容ガイドライン―」が提示された．本学では 2001 年から「準備教育モデル・コア・カリキュラム」について討議が進められ，準備教育に必要な項目が検討された．その検討委員会には複数の教養部教員が参加し討議した結果，2002 年 3 月に「準備教育モデル・コア・カリキュラム」が完成した[3]．2003 年からこのカリキュラムが実施され，授業科目名は大幅に変わり，これまでは「○○学」とされていたものが，学生にとり内容のわかるような科目名にすることになった．授業内容についても大幅に変更がなされ，これまで必修科目であったドイツ語が選択科目のひとつになった．その際，ドイツ語教員は各自が専門とする「ヨーロッパ文化論」「文学」などを担当することとなった．また，時間割[4] を見ると，この時期は学部横断必修科目がなかったため，選択科目は週に 2 日配置されていたが，2010 年度に改訂版が出され，2015 年度の時間割に示されるように，選択科目は週に 1 日，金曜日のみの配置となった．その後，医学部・歯学部の「モデル・コアカリキュラム」は 2016 年度に改訂された．

一方，薬学では 2006 年度から薬剤師の育成を明確な目的とした 6 年制薬学教育が開始され，学習内容を明確に示した「薬学教育・モデル・コアカリキュラム」は全国の大学の薬学教育の有用な指針となった．2013 年度には改訂が行われ，昭和大学では 2015 年度の 1 年生から「薬学教育モデル・コアカリキュラム平成 25 年度改訂版」が導入された[5]．この改訂版の，「薬学準備教育ガイドライン（例示）」では，「人と文化」の GIO（一般目標）に人文科学，社会科学および自然科学などを広く学び，物事を多角的にみる能力を養うとある．このようなモデル・コア・カリキュラムの改定時期に合わせて，選択科目である教養科目の見直しがなされ，多くの学問領域の科目が設置された．

モデル・コア・カリキュラムは学部により改訂年度が異なっており，富士吉田教育部ではその都度ワークショップを開催し，教養科目である選択科目について検討を重ねてきた．たとえば，2015 年に開催されたワークショップの F グループのテーマは，「次年時以降の選択科目の授業内容の検討および概要の作成」であり，1 年次だけではなく，2 年次，3 年次までつながるような選択科目を検討することであった．「富士吉田教育部理念[1]」である，視野を広げる，豊かな人間性，地域・国際社会との交流を中心に討議をすすめ，人文・言語・社会・自然などの分野から約 20 科目を選定した．このころになると，モデル・コア・カリキュラムで推奨された講義内容がわかる科目名をつけるということはなくなり，むしろ「○○学」が推奨されたため，これらの科目はすべて○○学となった．

このように，モデル・コア・カリキュラムと富士吉田教育部の選択科目とは密接なつながりがあり，今後もより良い方向に向け議論が続けられていくことが望まれる．

3. 初年次教育課程における選択科目の変遷

ここでは，選択科目の科目構成や履修制度の変遷を概観する．表 1 に 1970 年度，2003 年度，2015 年度の科目構成を示す．ただし，誌面の関係で 2003 年度，2015 年度は医学部前期の科目構成のみを示した．また選択科目の位置づけを知るために，選択科目だけではなく必修科目を含む科目構成を示した．

表 1 より，教養科目として履修可能な選択科目が多く確保されていることが分かる．たとえば，1970 年度では表 1 に示した科目中の 16 科目を履修することになっていたが，基礎科目より教養科目の科目数のほうが多い．2003 年度，2015 年度では教養科目として選択可能な科目数は，半期でそれぞれ 5 科目および 3 科目となっているが，選択科目の総科目数は依然として多い．「富士吉田教育部の教育理念」である「視野を広げ豊かな人間性を育む」[1]という目標に沿って，その理念を実現するための科目配置の実現には，各学生の興味・適性に応じた科目が存在していることが前提となる．この前提が，一定程度実現されてきたと言える．

科目数以外に広い視野を実現するために行われてきた工夫として，選択科目をその内容に応じて複数の科目群に分類し，各科目群の中から 1 科目以上履修させるという履修上の指導があげられる．例えば 2003 年度では全選択科目を表 2 に示すように 4 つの群に分類し，各群の中から 1 科目以上を選択することとなっていた．これにより，特定の近接分野の科目だけではないより広い分野から科目選択を行う

表 1　1970 年度，2003 年度，2015 年度の履修科目構成[1)]

1970 年度履修科目（医・薬学部通年）		2003 年度履修科目（医学部前期のみ）			2015 年度履修科目（医学部前期のみ）		
基礎科目	化学 物理学 生物学 比較生理学 数学 統計学 体育実技 体育理論	基礎科目	力と運動 物質の基本構造 生命現象の物質的基礎 細胞の構造と機能 生物の進化と多様性 情報リテラシー 統計の基礎 ヒトの行動と心理 Basic Reading Listening by CALL Conversational English 化学実習	必修	基礎科目	力と運動 生体分子の基本構造 細胞と遺伝子 情報リテラシー 統計の基礎 English for TOEIC Conversational English 総合サイエンス臨床実習入門 健康と運動の科学 保健・医療への招待 ヒューマンコミュニケーション チーム医療の基盤 在宅医療入門	必修
教養科目	倫理学 文化史 独逸語 英語 ラテン語 社会学 歴史学 経済原論 法学通論 心理学 美術史	教養科目	数学	必修	教養科目	ドイツ語 フランス語 中国語 日本語文章論 A 文学 生涯発達心理学 美術 人間と宗教 ジェンダーの社会学 社会関係と自己 民主主義と政治構造 法律学入門 数学 憲法学入門 ヒトのための地球環境論 感染症とバイオセーフティ	3 科目 選択必修
			ドイツ語 フランス語 日本語文章論 ヨーロッパ文化論 文学 美術 音楽 社会関係と自己 民主主義と政治構造 法とその精神 市場の働きとその限界 歴史認識と史料 自由と倫理 哲学的思考 運動スポーツ科学講義 運動スポーツ科学実技	5 科目 選択必修		人間学	必修
専門科目		専門科目	医学特論	必修	専門科目	医化学 形態学概論 基礎サイエンス医学部実習	必修

ことになり，「視野を広げる」という目的に対して実効性のある制度設計がなされていた．なお，複数の科目群からの科目選択は，2003 年度から 2009 年度まで実施された．

制度設計以外の面においても，選択科目の存在意義や教育効果を問い直す試みは継続して行われてきた．その 1 例は，例えば 2009 年に開催された「第 1 回 昭和大学富士吉田教育部選択科目検討ワークショップ」に見ることができる．この時期は，学部横断 PBL チュートリアルが導入されると同時に履修可能な選択科目数が減少した時期である．このワークショップでは，A．初年次教育における必修科目と選択科目の位置づけ，B．平成 22 年度開講選択科目について，C．選択科目開講のための基準について，の 3 つのテーマが設定され，富士吉田教育部の全教育職員が参加して選択科目についての議論が行われた．また，別の例として，学生が選択科目を選択する際の意識・態度を質問紙による調査に

表 2　2003 年度の選択科目の教育内容から見た構成[6)]

言語と文化を学ぶ	感受性を涵養する	社会的視座を身につける	人間の理解を深める
ドイツ語（AI，AII，BI，BII）	文学（A，B）	社会関係と自己	人の行動と心理（A，B）
フランス語（AI，AII，BI，BII）	美術（A，B）	近代家族論	自由と倫理
日本語文章論（A，B）	音楽（A，B）	民主主義と政治構造	生命倫理
ヨーロッパ文化入門（A，B）		国際政治学	哲学的思考
		法とその精神	現代思想
		社会生活と法	人間と宗教
		市場の働きとその限界	死生観
		国民経済と政府の役割	
		歴史認識と史料	
		歴史認識と歴史記述	

基づいて客観的に考察し，選択科目を選択する際の履修動機を明らかにした研究が挙げられる[7)]．これにより，学生が過去に受けた授業やシラバスなどをもとに各授業の特徴を理解し，主体的に科目選択を行っていることが明らかとなった．

こうした経緯を踏まえて 2022 年度に実施予定の選択科目構成を眺めると，選択科目数が減少している点が気がかりである．これまでに得られている経験・知見に基づいて，富士吉田教育部の良き伝統である魅力的かつ教育効果の高い選択科目を新たに開講するための努力が必要である．

4. 科目別の概説

ここで，選択科目を代表するいくつかの科目を取り上げ，その概略を説明する．具体的には，授業開設の経緯，授業の概要である．なお，随意で今後の課題を追加する．

1）サイエンス系科目

(1) 薬用植物の科学（担当・平井康昭）

薬用植物に関する科学的知識を医療の場で活かすために，生活の中で用いられる植物，薬草や毒草，ならびにそれらと医療とのかかわりに関する知識を身につける．

漢方製剤に用いられる生薬のほか，医療の現場で用いられる医薬品の半数以上は植物や動物など天然物に由来している．また，アウトドアライフの人気が高まるにつれ山菜と毒草の誤食による中毒が増加している．このような状況の中，薬用植物の知識は医薬品や誤食による中毒について理解するのに役立つだけでなく，患者とのコミュニケーションツールとしても有用である．本学の医系総合大学という特長を活かし，医学部，歯学部，薬学部，保健医療学部（看護学科，理学療法学科，作業療法学科）の学生を対象とした教養選択科目として，2014 年度からサイエンス系科目としては初めて薬用植物に関する講義を開講した．

講義では食品，健康食品，医薬品など，身のまわりで用いられている植物や有毒植物について実例を示し，わかりやすく解説するとともに，東洋医学との関係についても説明する．具体的には富士山周辺にみられる有用植物をはじめ，生活の場で利用される植物，食べられる植物，香辛料になる植物，サプリメントになる植物，体に有害な植物，麻薬や覚醒剤として用いられる植物，生薬，医薬品またはその原料として用いられる植物，医薬品開発のヒントなった植物について例を挙げ，利用法や中毒例について解説する．最後に東洋医学の概念について簡単に説明する．

履修者は，例年医学部生の 30%，歯学部生の 20%，薬学部生の 40%，保健医療学部生の 10%程度である．選択科目であることから講義に対する学生の意識が高く，受講態度も素晴らしい．

この講義は担当者の定年退職をもって閉講となったが，これまで受講してくれた学生の知識として医療の現場で活かされることを期待するものである．

(2) ヒトのための地球環境論（担当・長谷川真紀子）

2013年度までは選択科目がほぼ文系科目であったため，学生から自然系科目開設の強い要望があり，その1科目として2016年度に開講したのが本科目である．医療系大学の学生が生態系および人間活動が地球環境にどのような影響を与えているかなどについて知り，地球環境の現状と人間活動の関係，将来への地球環境と生物保全について学ぶ機会を得るには非常に有用であったと考えられる．

科目概要は生態系（森林と生態系，ヒト個体群の特徴），地球環境問題（地球温暖化，土壌汚染，水，食料危機，自然災害，放射能），生活環境と寄生虫の3項目とし，それらについて理解し，医療分野での基礎知識となるように，また，環境汚染物質とヒトの健康との関わりについても理解を深めるというものである．特に，学生にとり内部・外部寄生虫については在学中に学ぶ機会は少ないため，科目内で扱うこととした．最終回は学生個人が特に興味を持った環境問題について学修し，発表を行い，発表内容を共有する機会とした．

履修者は，医学部，歯学部，薬学部，保健医療学部の環境問題に関する興味関心がある学生であるため，受講態度が積極的で，アンケートの自由記述には，必修科目では学修する機会がなかったことを学べて良かったとのコメントがあった．また，各自が選択したテーマに関する発表では，充分に下調べし自分の考えを述べており，大変すばらしかった．この講義は担当者の定年退職をもって閉講となるが，受講者にとって幅広い教養の一部になってくれることを切に願っている．

(3) 感染症とバイオセーフティ（担当・荒田悟）

「将来，医療現場の職種に従事するために，感染症を理解するとともに感染事故や生物災害を招かないための基本的な危機管理の考え方と具体的な防御対策を身につける」ことを目標としている．全寮制の1年次に，学生たちが身近で経験・見聞きしている感染症に対して，危機管理に目を向ける機会としたいと考えている．

2014年に代々木公園で国内発症のデング熱が報告された，また同時期に西アフリカのエボラ出血熱のアウトブレークが起きた．連日のテレビでさまざまな意見や情報が報道されていたが，信憑性が低いものや困惑するものも見られた．医療者を目指す学生が「正しい情報に接して，正しく恐れ，適切に判断できる」ことを目標に，2015年度よりに開講した．

講義は「感染症の今昔」，「感染症から身を守る」，「感染症を考える」，および「バイオセーフティ」の4項目で構成されている．「感染症の今昔」では，現在でも世界で流行しているさまざまな感染症についてその歴史を含めて解説する．「感染症から身を守る」では，身体が持つ“免疫”などの生体防御機構を理解するとともに自身で経験した“免疫”を考える機会とする．「感染症を考える」は映画や講演録などから感染症は単に病気ではなく，政治，経済，紛争，スティグマ等とリンクしていることを意識する．「バイオセーフティ」は，生物災害や医療事故に対して危機管理を意識するとともに，「感染症法」によって国としての対策が取られていることを知る．評価は，感染症に関連したテーマを各自が選び，作成・提出されたレポートで評価する．

この講義は“将来ありえるかもしれないということ”を想定して開講したが，2020年度からは新型コロナウイルスの感染が世界的に拡大し，想定を上回る事象の中で授業を進めることになった．正しい情報を的確に伝えることで，少しでも危機意識と安心感を与えられるのではないかと感じた．日々変化する中で，何を伝えられるか，何をつたえるべきかを常に考えて行く必要がある．

2）人文社会系科目

(1) 文学A・B（担当・田中周一）

科目開設は1990年代に遡る．当初は3名による輪講形式で行われていたが，2000年代に入り田中の単独担当となった．その際，医療人をめざす学生たちを対象とする本学ならではの文学講義を模索し，これに基づいて2021年度までは「苦悩」という言葉をキーワードに授業を組み立てた[8]．

2022年度からは特に前期の内容を一新し，後期の授業展開を温存したうえで，ポスト・ヒューマニズムを軸とする授業構成に転換した．前期授業で中核をなす先端技術，すなわちサイボーグ，アンドロイド，人工知能は，それぞれ医療と密接に関連する．

ポスト・ヒューマニズムというキーワードには二つのアプローチが可能である．ひとつはポスト・ヒューマンを基盤としたうえで，その新たな -ism

を模索するというもの[9]であり，もうひとつは近代思想の基軸をなすヒューマニズムを検証しつつ，その後継（post）としての新たなヒューマニズムを模索するものである．前者が前期授業，後者が後期授業に対応する．

前期は20世紀SF小説の古典とされるアイザック・アシモフの短編小説集『我はロボット』を，後期は知里幸恵『アイヌ神謡集』を，それぞれ題材とする評論文作成を主要課題としている．

2022年2月，文学賞のひとつとして知られる星新一文学賞に初めて人工知能を用いた小説が入賞した．創作に関心を抱き続ける者にとって驚きの事実であったが，実はすでに2016年，人工知能を用いた小説が同文学賞の一次審査を通過している．創造こそ生身の頭脳の最後の砦との考えに揺らぎが生じた．文学を講じる者がこの問題を素通りすることは許されないと考え，前期授業内容の大幅変更となった．

（2）日本語文章論A・B（担当・田中周一）

大学生の日本語力が問題視されるようになって久しい．1990年代，個々のレポート課題等を綴る日本語の基礎力を高めることを目標にこの科目は開設された．現在に至るまで，状況は改善されるどころか，より困難の度合いを深めている．SNSの浸透による短文ばかりを主とする文字コミュニケーションの拡大などが，その一因である．

具体的な学修項目のうち，ひとつの核となるのが読解力の育成である．近年の看護師国家試験など医療系国家試験には問題の長文化が顕著であるが，大半は200～400文字程度のものである．この長さの文章を短時間で正確に読み取る訓練を行う．

もうひとつの核はレポート執筆の訓練である．高等学校までの作文は文学的文章に終始することが多いとの問題意識はかなり以前からあった[10]．2022年度から高等学校の「現代文」を「文学国語」と「論理国語」とに分ける枠組みが決まったことで，この状況に大きな変化が生じる可能性がある[11]．論理的な文章の執筆に重要なのは正確さと客観性であり，これと密接に関連するのが正確かつ偏りのない読み取り能力である．緻密に，かつ一定のスピード感をもって読み取る能力の育成を基盤としつつ，客観的な報告書を執筆する訓練を行う．

この授業を必要としない学生がいる一方，この学修機会を逸すると今後の学業全般に深刻な影響を及ぼすおそれのある学生もいる．日本語力に問題を抱えながらもそれと向き合うことを避ける学生に対し，いかにして立ち直りの機会を掴ませるかが今後の課題である．

（3）社会科学系科目（担当・須長史生）

もともと通年科目だった「社会学」が半期開講となったのが2003年のことである．セメスター制の導入や科目名の具体化などを検討するなかで，これを機会に本学における社会学の存在理由があらためて確認されることとなった．

いうまでもなく，社会学は医系の専門職に対して直接的に何か貢献をしているわけではなく，学生の人間的な成長の側面に働きかける科目である．そうであるならば社会学はどういった形で本学の教育に貢献できるのであろうか．

2003年の科目変更を睨んだ検討では，本学における存在理由や存在意義の根拠を無難に本学の教育理念に求めることとした．「人間性豊かな医療が実践できるような，高い倫理性と豊かな社会性を備え」[1]という部分である．ここでの倫理性が倫理学に対応し，社会性が社会学に対応するという読みは間違いである．高い倫理性にも社会学（的な知識や思考）は必要であるし，豊かな社会性にも倫理学は欠かせない．つまり本学における社会学の存在理由は学生の倫理性を高め，社会性を豊かにすることにある．

一般に社会性とは，社会の一員としての役割の遂行や存在感の提示といった程度のことを意味するが，医系総合大学の教育目標であることを踏まえるならば，自律的な個人が主体的に社会に参画し，その維持や発展に，専門職の立場から貢献することを意味すると理解すべきだろう．つまり単に社会になじむだけでなく，透徹した視点をもって社会（成員）の状況を見極め，正義の観点からそのニーズに対応できる見識，これの涵養に資するのが社会学の役割である．

続いて検討されたのが，その実践方法である．社会学の学問的な蓄積は上記のような期待に充分に対応しうる．しかし，その理論的な難解さや社会科学系特有のよそよそしさが学生との間に壁となる懸念があった．せっかく履修しても内容が伝わらなければ意味がない．そこで本講ではテーマの中核に全寮

制の考察を据えることにした．社会学は日常生活世界を題材に，世間一般の常識的解釈とは異なった視点からそれを分析できるところに特長がある．学生が全寮制度のなかでの共同生活に社会学的なまなざしを向けることで，空疎になりがちな理論研究に内実をもたらし，他方，日々生起する諸問題に対し主体的にそして自律的に向き合うことを促すことが可能になる．

これを実現するために特に，現代若者論（全寮制での生活）やジェンダー研究（男女関係なく専門職に就職志望の学生が多い），あるいは家族研究（医療では家族の存在の大切さを強調することが多い一方で家族に対する誤解が多い）などが適している．それゆえ社会学系の科目は ①若者の意識や価値観に照準し，アイデンティティのあり方を考えていく「社会関係と自己」，②性別秩序の問題を基礎から考えていく「ジェンダーの社会学」，③現在比較的多くみられる核家族を歴史的な一類型ととらえ，その特徴や限界性を明らかにしていく「近代家族論」の3教科として開講することとなった．

この体制は19年間継続したが，社会状況や学生の意識の変化を受けて，2022年度から社会学系の科目が前期2科目，後期2科目の合計4科目になり，科目名も「社会関係と自己」「ジェンダーの社会学」「現代社会学」「現代ジェンダー論」となった．変化した点は「近代家族論」が廃止となり，新たに「現代社会学」と「現代ジェンダー論」が加わったことである．「近代家族論」は昨今の家族の状況の変化からその役割を終えたと判断した．

代わりに開講する「現代社会学」は広く現代の社会現象を取り扱う応用的要素の強い科目であるが，ここでは特に現代の若者の意識や行動の特徴を社会学的に理解し，実際の若者現象を考察することを主たる目標とする．またジェンダーに関しては，社会状況がめまぐるしく変化していることに鑑み従来の基礎的な内容に加えて，現代的なジェンダー現象すなわち男性，性的少数者，さらにはルッキズムの問題などを取り上げることとした．これらについては，単なるトピックとして処理をするのではなく理論的な背景に結びつけて考察を加えていくことが肝要である．「現代ジェンダー論」はこの任を担うべく位置づけられている．

我々が住まう現代社会は常に変化を遂げ，価値観もそれに応じて複雑に変化している．そのような社会において「高い倫理性と豊かな社会性を備え」た人間に至ることをめざす教育を施すには，やはり社会状況に応じた，しかし風潮の変化に流されない理論的な背景に依拠した確固たる教育が必要である．社会学はその一翼を担うべく，富士吉田の片隅にひっそりと毒を吐いている．

3）実技系科目

（1）医療人のための教養とマナー（担当・長谷川真紀子）

将来，医療人をめざす学生にとり必要な，日本文化に対する教養やマナーを身につけるための科目が設置されていないため，2019年度から開講することとなった．科目の特徴として演習を伴うため，履修者数を制限し，1コマ30名で3コマ行った．また，履修希望者数が多くなることが予想されたため，前期・後期とも同じ内容で行うこととした．

授業概要は挨拶の基本および日本文化の特徴を知り，日々の生活や特別の場で必要とされるマナーについて，演習を通して学修し，その基本を習得するというものである．すべての日本文化について触れるのは難しいため，書道，華道，茶道，礼法（マナー）についての体験を伴う授業内容とした．いずれの分野も専門家が実技指導を行った．

学生は書道，礼法の授業で学んだ，筆の使い方，テーブルマナー，服装についての復習のために，ホテルの宴会場の受付で筆を使い記帳し，コース料理をいただくという実践的な体験をした．また，華道では日本古来の水盤を使い，精神を集中し花を生けるという演習を行った．茶道では富士吉田校舎の体育館を使用し，お茶会を開催し，役割を分担しながら抹茶をたて，お菓子をいただくことを体験した．

医学部，歯学部，薬学部，保健医療学部の4学部の学生が幅広く履修し，前期・後期のすべての授業は定員一杯であった．この講義は担当者の定年退職をもって2021年度で閉講となったが，履修者にとり授業内で体験したことが，将来につながることを期待するものである．

5. 今後の展望

選択科目の今後はどうあるべきか，最後にその展望を考察したい．2022年度開講予定科目は以下の

表 3　2022 年度の選択科目（数字は単位数）[12)]

前期		後期	
ドイツ語 A	1	ドイツ語 B	1
フランス語 A	1	フランス語 B	1
中国語 A	1	中国語 B	1
日本語文章論 A	1	日本語文章論 B	1
文学 A	1	文学 B	1
美術 A	1	美術 B	1
人間と宗教	1	医療人としてのコミュニケーション入門	1
ジェンダーの社会学	1	現代ジェンダー論	1
社会関係と自己	1	歴史遺産への招待（京都）	1
民主主義と政治構造	1	法学	1
法学	1	感染症とバイオセーフティ	1
数学	1	死生観	1
医療心理学	1	現代社会学	1
感染症とバイオセーフティ	1	国際政治学	1
情報リテラシー	1	ポーランド州立大学サマープログラム	1
療法的な音楽活動	1	感性を掘り下げる色彩と造形	1

表 4　学系と科目群の展開例

人文科学系	哲学・宗教学・言語学・人類学・地理学・文学・心理学など
社会科学系	政治学・法学・経済学・社会学・教育学など
国際文化系	欧米文化論・アジア文化論・オセアニア論・アフリカ論など
芸術文化系	芸術学・美術史学・音楽文化論・舞台文化論・映像文化論・漫画論など
生活文化系	服飾文化論・料理文化論・観光文化論・交通文化論など
自然科学系	天文学・地質学・自然地理学・環境科学など（必修科目にない科目）
応用科学系	計算機工学・工学・建築学・農学・デザイン学など（必修科目にない科目）
外国語学系	ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・韓国語など

とおりで（表3），科目数の減少や担当者の異動はあるが，科目構成に大きな変更はない．

この現状を踏まえ，今後の課題を二つ示したい．ひとつは，学生一人当たりの履修科目数についてである．選択科目はさまざまな分野の学問を幅広く学修する場であるが，履修上限が3科目の現状では，仮に科目が増加しても，選択の幅は依然限られよう．この問題の解決には，カリキュラム全体における選択科目制度の抜本的見直しが必須となろう．

それにはしかし，その前提として，本学の初年次教育における選択科目の意義の再考と明確化が問われてしかるべきである．これが二つ目の課題である．それはまた，教養や知の何たるかを問う理念的構想から，設置すべき科目の具体的構成と水準まで，さまざまな位相において問われてよい．いずれにしても肝要なのは，学生の知的関心に応える科目が用意

されるだけでなく，関心がなかった領域に新たな関心を呼び覚ますような工夫がなされることであろう．

学生にとって現状の科目提示（表3）では，個々の科目の学術的位置づけや他科目との連関が理解されにくいように思われる．そこでまず科目を分野ごとに束ね，学生が俯瞰的に各科目の位置づけを把握できるようにし，そこから偏りなく科目を選択できるようにすべきであろう．表4はその一案である．

古典的な分類にヒントを得たが，学系も科目群もさらにアレンジされてよい．あるいは，学問の広がり自体を紹介する特別科目があってもよいし，そのなかで学生の知的関心を経年的にリサーチしてもよいだろう．「進級要件に必要だから履修する」という消極的な「選択」から，学生各人の知的好奇心に応答し，あるいは知的関心なきところに新たにそれを呼び覚まして，自由な知的冒険と教養探索の積極的「選択」へと誘う工夫が求められる．今後の展望の実現の鍵は，これまでの蓄積を礎に，広範かつ深遠な知的関心に支えられた教養豊かな医療人育成をいっそう新たな課題として富士吉田教育部全体で支持し，議論し，準備することができるか否かにあると言えるのではないだろうか．

文　献

1）昭和大学富士吉田校舎50年誌編纂委員会．1年次のカリキュラムの推移．昭和大学富士吉田校舎50年の歩み．東京: 教育広報社; 2016. pp80–81.

2）木内祐二．改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムによる薬剤師教育への期待．薬剤学．2016; **76**:285–288.

3）昭和大学準備教育コア・カリキュラム．2002.

4）昭和大学教養部時間割 2003.

5）薬学系人材養成の在り方に関する検討会．人の行動と心理．薬学教育モデル・コアカリキュラム．平成25年度改訂版．平成25年12月25日．pp91–92.

6）昭和大学教養部．授業計画（SYLLABUS 2003）．東京: 創文社; 2003.

7）須長史生，小倉　浩．教養系選択科目における学生の履修行動に関する考察．昭和大学富士吉田教育部紀要．2011;**6**;99–110.

8）2021年度電子シラバス．富士吉田教育部「文学A」および「文学B」それぞれの学修成果．

9）岡本裕一朗．ポスト・ヒューマニズム　テクノロジー時代の哲学入門．ポスト・ヒューマニズムという論点．東京: NHK出版; 2021. pp18–29.

10）三木光範．科学にとっての国語力とは　論理伝達力を国語教育に取り入れよ．産経新聞　正論．2002年10月27日．p7.

11）文部科学省．高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説，国語編．論理国語．平成30年7月．pp144–177.

12）富士吉田教育部教育委員会資料．資料10　令和4年度薬学部別表（2）．令和4年2月22日付．p43.